

2022年5月15日（日）「愛するという自由」

ガラテヤ 4:12-15

12 きょうだいたち、お願いします。私もあなたがたのようになったのですから、あなたがたも私のようになってください。あなたがたは私を傷つけるようなことを何一つしませんでした。13 知ってのとおり、私が最初あなたがたに福音を告げ知らせたのは、私の肉体が弱っていたためでした。14 そして、私の肉体にはあなたがたのつまずきとなるものがあったのに、あなたがたは蔑んだり、忌み嫌ったりせず、かえって、私を神の天使のように、そればかりか、キリスト・イエスのように受け入れてくれました。15 それなのに、あなたがたが味わっていた幸福は、どこへ行ってしまったのですか。あなたがたのために証言しますが、あなたがたは、できることなら、自分の目をえぐり出してでも私に与えようとしたのです。

【序論】

ガラテヤ書を通して、一緒に「キリスト者の自由」を学んでおります。私たちは、本書を学び終えたとき御言葉によって造り変えられた自分の姿を思い描きながら、これを読み進めていきたい。聖霊が御言葉を通して自分の人格に働きかけ良い御業をなしてくださることを求めつつ聞いていくとき、その時限りの感謝ではなく、福音に生きる豊かな人生が現実になっていくでしょう。今日はその一つの側面として、「キリスト者は病に対してどういう自由を得ているか」という問題に取り組んでまいります。病というものは誰にとっても好ましいものではなく、できれば関わりなく生きていきたいものですが、大伝道者パウロにも厄介な患いがあったという事実が伝えられています。彼自身がその病をどう認識していたか、またガラテヤの信徒たちがそれをどう見ていたかが分かる内容です。腎不全であった私の父親も然り、私自身も様々な肉体的弱さを抱える身ではありますが、その上で尚、主がどのようにこの人生を生かしてくださっているかを証ししていきたいと思えます。

【本論】

本論 1. 福音によって一つ

きょうだいたち、お願いします。私もあなたがたのようになったのですから、あなたがたも私のようになってください。(4:12a)

この 12 節からは、本書では珍しく、ガラテヤ教会に対するパウロの個人的な訴えが始まってまいります（このような訴えは特にⅡコリント書で顕著）。「きょうだいたち」という呼びかけは、神を父と呼ぶ者同士に与えられた特別な関係を表し、パウロが読者の心を揺り動かそうとするとときに登場します（1:11、3:15、4:28, 31、5:11, 13、6:1, 18）。しかも「お願いします」と懇願するかのように涙の訴えが続いていくのです。

「私もあなたがたのようになった」とは、ユダヤ人であるパウロが異邦人と同じ立場に立ち、律法を遵守する生き方を捨てて彼らに仕えたことを意味します。それは、律法の要求に応えるのではなく、人が神の恵みによって義とされうることを証明するためでした。主の恵みに依り頼むこと、それだけが人を罪から解放する。この恵みは人種的な垣根を打ち壊し、あらゆる差別を撤廃するという、副次的な作用をもたらします。パウロはこの新しい生き方を始めたとき、異邦人とまったく一つになることができたのです。

ですから、「あなたがたも私のようになってください」とは、「私たちは主にあって同じ兄弟姉妹なのだから」というニュアンスでしょう。神の恵みに生きる私たちは、律法の要求に縛られた人生から解放されました。だから、神の霊に満たされ、罪赦された者として自由に神に近づくことができる。神は私たちをそのままの姿で愛してくださっているのだから。

しかし、律法的な生き方というのは、いつでも私たちを再び押さえ込み始める可能性があります。なぜなら、私たちの生来の性質が自らに罪を犯させ、何らか差別的な視点をもって他者を見させようとするからです。パウロの時代、それは特に病の問題において現れやすいものでした。なぜなら、病は何らかの罪の結果もたらされるものという因果応報的な思想が、長い歴史の中で構築されてきていたからです。

本論 2. 使徒職の承認

あなたがたは私を傷つけるようなことを何一つしませんでした。知ってのとおり、私が最初あなたがたに福音を告げ知らせたのは、私の肉体が弱っていたためでした。そして、私の肉体にはあなたがたのつまずきとなるものがあつたのに、あなたがたは蔑んだり、忌み嫌ったりせず、かえって、私を神の天使のように、そればかりか、キリスト・イエスのように受け入れてくれました。（4:12b-14）

パウロは初めて自分がガラテヤの地を訪問したときのことを振り返っています。それがいつのことであったかは、使徒 16:6 を読むと分かります。

さて、彼らはアジア州で御言葉を語ることを聖霊から禁じられたので、フリギア・ガラテヤ地方を通って行った。（使徒 16:6）

これはパウロの第二回伝道旅行の道中のことで、元々はアジア州¹へ行く予定だったところ、主が何らかのストップをかけられて方向転換したことを示しています。今日の箇所を照らして見ると、パウロが肉体的に弱っていたため、目的地へ向かう体力がなかったという可能性があるでしょう。彼がどんな病気に罹っていたかについては諸説あります。小アジアの風土病であるマラリア熱に冒されていたか、癲癩の発作を伴う病であったか、あるいは目の病気であったか。小アジア地域の人々は、マラリア熱を「神の呪い」と捉え極度に忌み嫌う傾向があったということから、パウロがその病に冒されていた可能性が高いでしょう。本来、ガラテヤの人々から敬遠されても仕方のない状態であったということを、彼自身が証言しているからです（私の肉体にはあなたがたのつまずきとなるものがあった）。

今でこそ、病気を「呪い」などと呼ぶことは差別扱いだとして逆に非難を受ける対象となりやすいですが、当時の染み付いた価値観を覆すことが如何に困難であったかを、読者はよく読み取る必要があります。私も8年ほど前にひどい皮膚の病に罹り、人前に立つこともできないほどになりました。あの地獄の日々は思い出したくもありませんが、古代社会の価値観が生きていましたら、私は「どんな罪を犯したのか」と問われ、間違いなく牧師をやめさせられていたはずです。しかし、皆様の祈りによってここまで回復することができました。

ガラテヤの人々のパウロに対する態度には思いやりがあったようです。彼らは「蔑んだり、忌み嫌ったりせず、かえって、私を神の天使のように、そればかりか、キリスト・イエスのように受け入れてくれました」とパウロは振り返っています。彼らのパウロに対するこの姿勢は、パウロが如何なる病に罹っていたとしても、福音宣教の使者、神に召された人として尊重したことを意味します。つまり、彼らはパウロの語る福音のメッセージを受け止め、そこには確かな真理があることを認めたのです。病気のパウロを受け入れたということは、実はもっと根本的な「使徒職の承認」という意味が隠されていた。更に言えば、彼らは福音に生かされることによって、病人を差別するという長年の価値観からも解放されていたのです。このように、福音はあらゆる差別を撤廃し、人と人との間の垣根を打ち壊す力を持っています。

¹ 「フリギアは、アジアとガラテヤにおけるローマ領の一部を含む小アジア内の地域。パウロはガラテヤ地方の書教会へ手紙を書いた（ガラ 1:2）。アジア州は地中海に接するフリギア西部のローマ領。小アジアのピシディア州のアンティオキアからアパメイア、コロサイ、ラオディキアを通り、エフェソを結ぶ町はローマ領である。*『フリギア・ガラテヤ』となっているのはローマ領のガラテヤではなく、ガラテヤ人の住む本来のガラテヤ地方を指し、フリギアの東部から北に向かって小アジア中央部まで広がっていた地域。」（聖書協会共同訳注）

本論3. 使徒職の承認＝福音の承認

それなのに、あなたがたが味わっていた幸福は、どこへ行ってしまったのですか。あなたがたのために証言しますが、あなたがたは、できることなら、自分の目をえぐり出してでも私に与えようとしたのです。(4:15)

パウロは、かつてガラテヤの信徒たちが自分に示してくれた愛に基づき、その頃の彼らと豹変してしまった教会の空気とを較べ、一体どうしてしまったのかと悲しみを表します。「あなたがたが味わっていた幸福」とは、福音に生かされていた頃の彼ら、使徒を愛し、彼が如何なる病に罹っていたとしても労ることのできた彼らの自由です。その自由はどのように失われてしまったか。それは、ユダヤ主義者たちによる真逆のメッセージに耳を傾けたからです。彼らはガラテヤの信徒たちに割礼を求めてきた。つまり、ユダヤ人になることを要求したのです。そうでなければあなたがたに救いはないと。律法を遵守することなしに神の御前に義とされる道はないと彼らは教えていました。不思議なことに、「こうでなければならない」という思考が固まっていきますと、そこには差別的な視点を取り戻され、心の壁が再び高く聳え立つようになります。あるいは、長年に亘って自分を捕えてきた何らかの「常識」が人を裁く基準となることもあるでしょう。

これは子育てをしているときによく自問自答することでもあります。自分の中には親が語っていた「子育て観」というものが耳に残っていて、昔父親に言われたことが「律法」となって、その律法でもって我が子を裁いているということにふと気がつくことがあるのです。そのような時は一度先入観を捨てて、「親が言っていたことは本当なのか？」

「その根拠は何か？」とできる限り問い直すよう心がけています。父親が祖父に言われたことを、そのまま自分も受け継ごうとしているかもしれない。しかし、恵みによって自由にされた者は、その「常識」からも解放されたのではないのでしょうか。もはや、その連鎖に囚われ続ける必要はなく、自分の代で断ち切ってもよいのではないか。

パウロは、ガラテヤの信徒たちがかつて自分に示してくれた愛を「**自分の目をえぐり出してでも私に与えようとした**」と表現しています。これを根拠に、パウロには眼病があったと解釈する人もいますが、必ずしもそのように読む必要はないでしょう。むしろこれは、パウロにとって益となるならば、彼らにとって最も大切なものを差し出そうという、無条件の愛を表す誇張表現です。ここで使われている「ἐξορύσσω／エクソルツソー」という動詞は、中風の男性を主イエスの許に連れて行った4人の友が、何としてでも彼を癒してもらおうと屋根に穴を開けて吊り降ろしたという箇所(マルコ2:4)にも出てきます。この非常識とも言える愛の行動は、信仰から出てくる。人を愛するところに、この世の常識からも人を自由にする福音の力があるのです。

【結論】

今日の箇所は、単に「君たちは以前は私に対してやさしかったのに、今はずいぶん冷たくなってしまったじゃないか」というパウロのセンチメンタルな気持ちを伝えているわけではありません。むしろパウロは、彼らが自分に対してそっぽを向いてしまったことは、彼に福音のメッセージを託された主イエスご自身からの離反であるということをおうとしているのです。主イエスから離れるとき（つまり福音に生きなくなるとき）、人は自由を失います。中風の男性を吊り降ろした友人たちは、もはやこの世の常識とか人目を気にしてはいませんでした。何としてでも友人を助けてあげたい、その思いで一杯だったのです。福音は世の常識をはるかに超えていく力を持っています。人を心の底から愛し、突き動かすものなのです。

蛇足になりますが、キリスト者になったからとて、金輪際病に罹らないということではありません。しかし、福音を信じる時、その病の只中にあっても、神との生き生きとした関係を日々味わうことができます。病そのものは辛いものでありますが、主イエスはその重荷を共に負ってくださっている、誰よりも理解してくださっているからです。

【祈り】

慈しみ深い天の父なる神様。あなたは分け隔てなく、どんな人種の人間をも愛し、救いに招いてくださっています。福音によって、あらゆる差別が撤廃されたのです。病人もまた、救いから漏れることはありません。如何なる患いがある人も、あなたの懐で安らぐことができます。私たちもこの恵みを受けた者として、人を受け入れる心を持つことができますように。隣人を主の安らぎの許へと招き入れていくことができるよう、導いてください。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
福音に生きる者を御許に招き、価なくご自分の子となし給う、父なる神の愛、
人種、性別、社会的地位、健康状態を問わず、等しく愛の御手を伸べ給う、主イエス・キリストの恵み、
神の国に生きるところに互いを受け入れ合う心を豊かに与え給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。